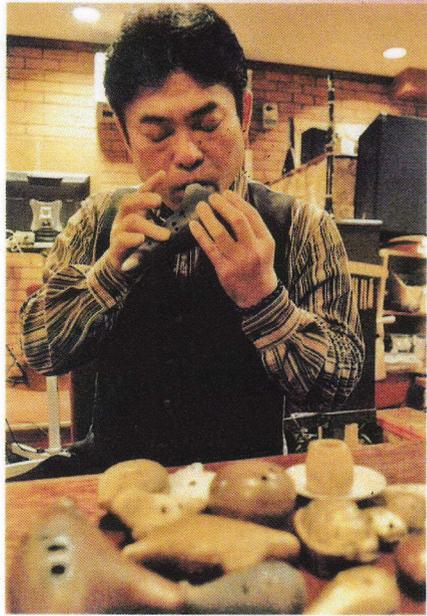


仲里尚英さん(57)

難聴のオカリナ奏者



さまざまな形の自作オカリナを前に、演奏する仲里尚英さん
■那覇市・茶色の小瓶

逆風を何度かはねのけ、全国で演奏を繰り返している難聴のオカリナ奏者がいる。仲里尚英さん(57)。「那覇市」は右耳がまったく聞こえず、左耳もわずかに聞こえる程度。一時は、よりどころだった音楽に見放されそうになったが自らたぐり寄せ、今では障がい者向けのオカリナまで自作する。コンサートでは過去を冗談交じりに語る。「目指すのは完ぺきな音と演奏。それだけ」。素朴で伸びやかな音に、謙虚な生きざまが奥行きを与え、人々を惹きつける。

社会



複雑な家庭環境で育った。4歳のころ両親が離婚。「父と母、親せきの間をぐるぐる預けられた」。幼稚園3度、小学校2度、中学校4度の転校をした。

「今、思えば自閉気味だった。かなりのいじめられっ子」

生活に光を照らし続けてくれたのは音楽。小学校で使うハーモニカやリコーダーを2年生のころから暇を見つけては吹いていた。すべて独学。テレビなど、生活の中から聞こえるメロディーをこつこつなぞった。

中学、高校は吹奏楽部でクラリネットを専門としたが、「料理人を目指せ」と周囲に押し切られる形で16歳で高校を中退。大阪へ渡った。昼は修業し、夜はギターで「一流し」を始めた。音楽とは常に寄り添った。「演奏を通じ、夜の街で少しずつ人とのふれあい方を知った」

障がい者向け制作も

■徐々に遠のく旋律

商魂も鍛えられ、22歳で沖縄に帰るとスナックを開いた。マスター兼ギター弾き。人生が上向き始めた。

が、10年後に原因不明の難聴に。徐々にメロディーが遠ざかった。日々増す、耳の圧迫感を我慢し、ステージに立ち続けたが、客からギターの音量が大き過ぎることをとがめられた。

「ショックだった」。半年間、楽器から離れた。自暴自棄となり、ある日わりはしを右耳の奥深くまで突き刺し、けがを負った。

転機は偶然目にしたテレビ番組。筋ジストロフィー患者のバンド演奏に「大衝撃を受けた。すぐ楽器店へ行った」

自然と目に入ったのは、ほこりをかぶったオカリナ。吹いてみて、音が体内で響き渡る感触に震えた。

「材質が人間の骨と似ているのか、体との共鳴度合いが段違っていた」
幼少のころのように手探りで吹き続けた。

■技と感性フル活用

ほどなく、現在も経営する那覇市久茂地のスナック「茶色の小瓶」でオカリナを披露。店内を穏やかな空気で包み、評判が広まった。病院や障がい者施設など、全国から演奏依頼が来た。奏するのはクラシックから童謡やアニソンなど幅広い。軽妙なトークも好評で、若い過去も笑い話に代えている。人生訓めいては話さない。

「『頑張って』なんて(ニューアンスでは)話ほしない。苦勞の感じ方は人それぞれ。言われなくてもみんな頑張ってる。僕より苦しい方は、たくさんいる」
ただ、病人や身障者と接する

うち、「わたしでも吹けますか?」と尋ねられる機会が増えた。

「12穴あるため両手の指を使う。『はい』と答えられないところが心苦しかった。手軽に吹けるものがあれば」と思うようになった。

たまたま来店した東京の職人に師事し、4穴のオカリナを作るようになった。動物やおわん形など、ユニークな形の作品も作りためてきた。自作し始めて10年に満たないが、作品数は1500以上だ。

作り手となった今でも、年に40回以上の演奏依頼を引き受ける。技、知恵、感性をフル活用して無比のアーティスト道を歩み続ける。(松田興平) (毎週日曜日に掲載します)

【人物データ】なかざと・なおひで 1953年、佐賀県に生まれ、那覇で育った。楽譜なしで練習するのがモットー。「習得は遅いけど、体全体で音を吸い込める」

素朴な音 生き方と共鳴



2011年 1月16日 日曜日
【旧12月13日・赤口】
発行所 那覇市中央1丁目14番地
〒900-0001 沖縄タイムス社
電話代表 (098) 960-3000